

ユーラシア馬面に見られる文化交流：秦漢時代中国における馬面の起源問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2992

ユーラシア馬面に見られる文化交流 ：秦漢時代中国における馬面の起源問題

柳生俊樹（金沢大学大学院）

はじめに

「馬面」とは、馬の鼻梁を装飾する器物であり、ユーラシアの各地に分布している。日本でも、特に漢代中国の馬面の起源に関連して早くから注目されており、少なからぬ論著がある。しかし、そこでは、中央ユーラシア草原地帯（以下、草原地帯）の考古学的知見が十分に加味されていないように思われる。そのため、1）草原地帯の馬面をより詳しく検討し、2）秦漢時代中国における馬面の起源を改めて考えたい。

資料

本発表に関連する資料を、草原地帯（1-11, 図1参照）、中国（12-14, 図2参照）の順に挙げておく。

1. トゥバ、アルジャン I

円形。中央部が半球状に突出。突出部が銀製、その他は金製。直径約10cm。前8-7世紀。

2. トゥバ、アルジャン II

報告未刊のため詳細不明であるが、後に述べるアルタイの例から推して、馬面と考えられる。

丸みを帯びた三日月形を呈する。前7-6世紀。

3. アルタイ、トゥエクタ 2 号墓

木製。円形。中央部が半球状に突出。二羽の猛禽あるいは怪鳥を表現する。前5世紀（巽2005: 37参照）。

4. 山地アルタイ、パジリク 1 号墓

円形。中央部が半球状に突出。三日月形、アーモンド形などもある。前4世紀（巽2005: 37参照）。

5. 山地アルタイ、シベ

木製金貼りのものが3点出土。うち1点は、アーモンド形。長さ27cm。他には円形のものもある。前3-2世紀頃。

6. 平地アルタイ、ピスク I-12 号墓

全体は角製であるが、そこに青銅製のボタンを差し込んだようになっている。アーモンド形。合計8点。シベと同時期、つまり前3-2世紀頃のものと考えられる。

7. 内蒙古、呼魯斯太 2 号墓

青銅製。アーモンド形を呈し、上部に半球形の突出部がある。同形のものが6点出土。長さ5.3cm。

8. 寧夏、馬莊 III- 5 号墓

青銅製。平面がアーモンド形を呈する。上部に管状の突出部がある。長11.0cm。

9. コーカサス北麓、ケレルメス 27 号墓

殉葬された馬に伴い、2点出土。長さ34cm弱。金製。非常に薄いもので、元来は革に貼り付けたものと考えられる。前7世紀。

10. 黒海北岸、ザヴァツカヤ・モギーラ 1 号墓

青銅製で、細長く、角張ったしゃもじ形を呈する。長さ43cm。

11. 黒海北岸、ポリシャヤ・ツインバルカ

金の薄板で作られていて、元来は木や革の板に貼り付けたものであろう。細長く、角張ったしゃもじ形を呈する。下半身が蛇になった女性あるいは女神が表現されている。長さ41.4cm。前4世紀（巽2005: 37参照）。

12. 中国、陝西省西安市張家坡 183 号墓

青銅製。全体的に細長く、上部に獣面を表現する。長さcm。前10世紀（巽2005参照）。

13. 北京市房山区瑠璃河 1193 号墓

青銅製。平面形がY字形を呈する。長さcm。前10-9世紀（巽2005参照）。

14. 中国、陝西省始皇帝陵 1 号銅車馬

1980年出土の馬車の模型。車を牽く4頭の馬は、額にアーモンド形の馬面を付けている。前3世紀。

15. 中国、山東省章丘市洛荘漢墓

墓の周囲の祭祀坑群のうちの4号坑で出土。平面形がアーモンド形である。正面には、末端が鳥頭状の角を生やし、嘴を持った馬のような怪獣が表現されている。後脚を180°捻っている。墓の年代は、前187-180年の間に位置づけられる。

16. 中国、河北省満城漢墓 1 号墓

前113年に亡くなった中山靖王劉勝の墓。細長く、角の取れた逆三角形を呈するものや、獣の顔を表したようなものがある（巽2005参照）。

草原地帯の馬面

草原地帯の馬面に関しては、一括して扱われることもあった（e.g. 巽2005）。しかし、少なくとも、草原地帯の東と西で分けた方がよからう。

なぜなら、まず、馬面の分布が草原地帯の東（Nos. 1-8）と西（Nos. 9-11）に大きく偏り、その間に大きな空白があるからである。さらに、草原地帯の東西で、馬面の型態が大きく異なる点が挙げられる（図1）。すなわち、草原地帯の東部では、前8-7世紀以来、円形、三日月形、アーモンド形など、比較的小さく、幾何学的なものが主体である（Nos. 1-8）。一方、草原地帯の西部では、細長く

角張ったしゃもじ形のもので主流である (Nos. 9-11)。このような点を考慮すれば、少なくとも馬面に関する限り、草原地帯には東西文化交流は認められないと言えよう。

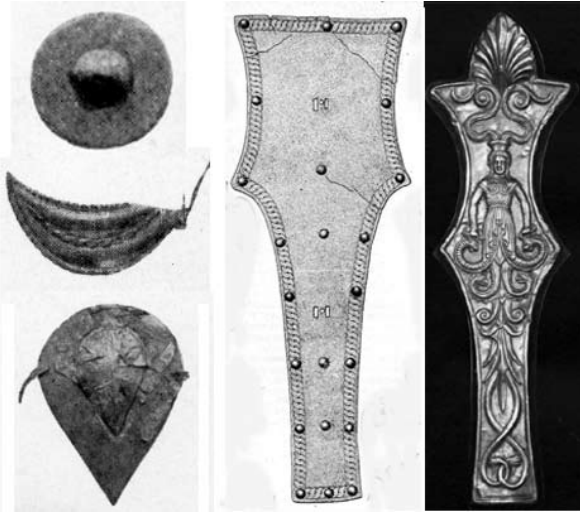


図1 草原地帯の馬面

秦漢時代中国の馬面

中国では、西周の初め頃に馬面が出現する (No. 12)。ところが、春秋・戦国時代には見られなくなってしまう。しかし、秦の時代になると再び現れ (No. 14)、前漢以後、盛んに見られるようになる (Nos. 15-16)。

かつては、漢代の馬面 (e. g. No. 16) の源流が、遠く黒海北岸のスキタイのそれに求められた (江上ほか 1934; 駒井 1936; 相馬 1977)。しかし、最近、中国における西周以来の独自の発展を重視する説が発表された (巽 2005)。

発表者は、草原地帯の東西で馬面に大きな相違が見られることから、後者により説得力ありと考えている。さらに、草原地帯からの影響の有無を言うならば、満城漢墓出土例 (No. 15) などよりもむしろ、アーモンド形を呈するもの (Nos. 14-15) が重要である、と考える。なぜなら、同様の馬面が、草原地帯の東部に見られるからである (Nos. 4-8)。

草原地帯東部におけるアーモンド形馬面は、前 4-2 世紀の間に位置づけられる。同様のものが、中国 (Nos. 14-15) で前 3 世紀以降に出現するとすれば、草原地帯東部から中国への伝播を想定しても矛盾はなかろう。

また、洛荘漢墓出土例 (No. 15) に表現された紋様にも注目したい。このように後脚を捻った有角怪獣は、山地アルタイのパジリク 2 号墓の被葬者がしていた入れ墨の怪獣紋様と似たものである。すなわち、草原的かつ非中国的な紋様である。そうした紋様の存在は、馬面自体の

外来性を示すものであろう。

さらに、趙の武靈王による「胡服騎射」の導入に関連するものであろうが、戦国時代末の中国における馬文化に、草原地帯の要素が見られることにも注目したい。例えば、始皇帝陵の銅車馬の馬に見られる鬣の処理である。鬣は全体が刈り込まれているが、一部が長く残されている。同様の処理は、パジリク 5 号墓出土の壁掛けや、ピョートル・コレクションの帯飾板、南ウラルのフィリポフカ出土の木製容器装飾板に表現された馬に見られ、草原地帯ではかなり広く行われていたものである。また、始皇帝陵出土の馬俑には鞍を付けたものがあるが、その鞍も、やはり草原地帯出土の実物 (e. g. パジリク 1 号墓) や、ピョートル・コレクションの帯飾板に見られるものとよく似ている。

以上のように、両者の年代、馬面に見られる外来性、



図2 中国の馬面

草原地帯に連なる馬文化を考慮すれば、秦から前漢初め頃のアーモンド形を呈する馬面も、草原地帯の東部からの影響とみなすことができよう。さらに、そこから発展して、細長い逆三角形の馬面 (No. 16) が生まれたと考えたい。

まとめ

草原地帯の馬面は、東西で様相が大きく異なる。そのため、中国の馬面に対する中国外の影響を問題にするならば、遠く離れたスキタイのものよりも、むしろ近接する草原地帯東部の事例をまず参照すべきである。そのような観点から、秦漢時代の馬面の起源を考えてみれば、アーモンド形を呈するものの中に草原地帯東部の馬面の影響を見て取ることができる。

<主要参考文献>

- ・江上波夫、水野清一 1934「綏遠青銅器」『内蒙古長城地帯』東亜考古学会 (東方考古学叢刊乙種第一冊)
- ・駒井和愛 1936「先秦時代の馬面とその始源」『史苑』10-2 (駒井『中国考古学論叢』慶友社 1974: 52-55 に再録)
- ・相馬隆 1977「楽浪出土馬面考：とくにツィンバルカ古墳出土の馬面との関連について」『流沙海西古文化論考：シルクロードの東西交流』山川出版社
- ・巽善信 2005「馬面から見た文化交流」『西アジア考古学』7: 35-45